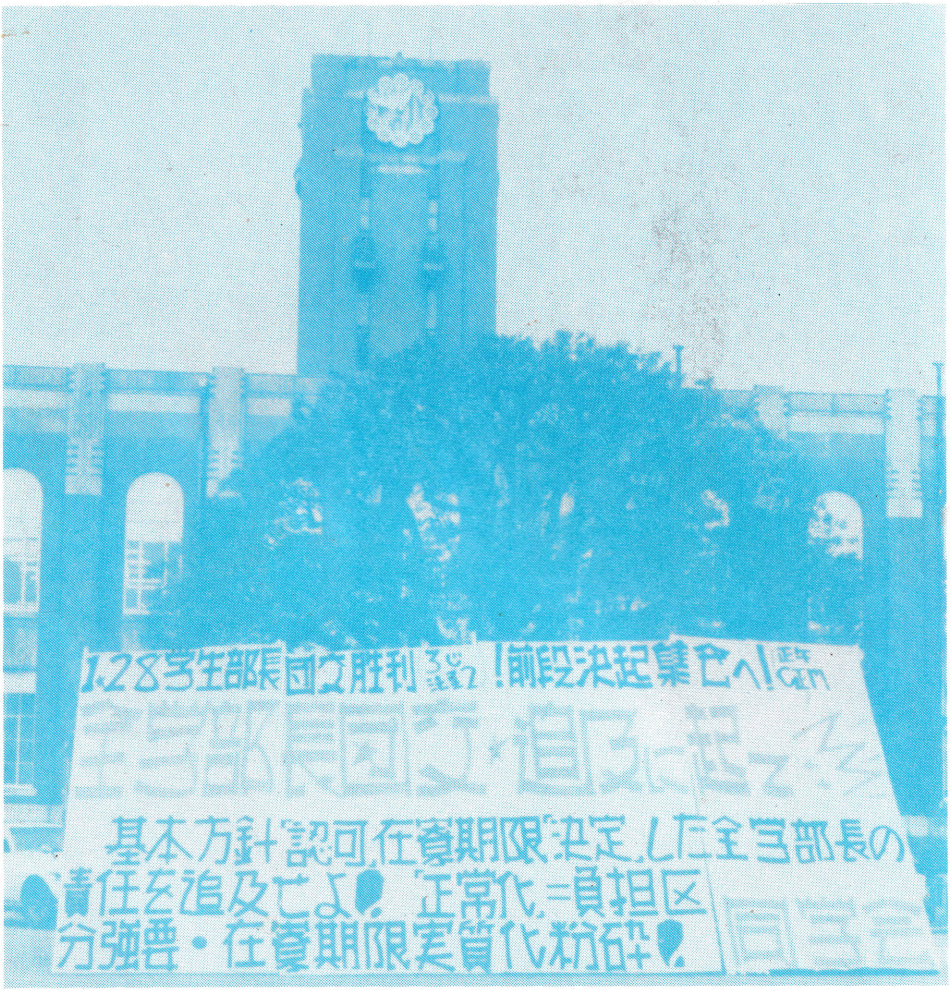
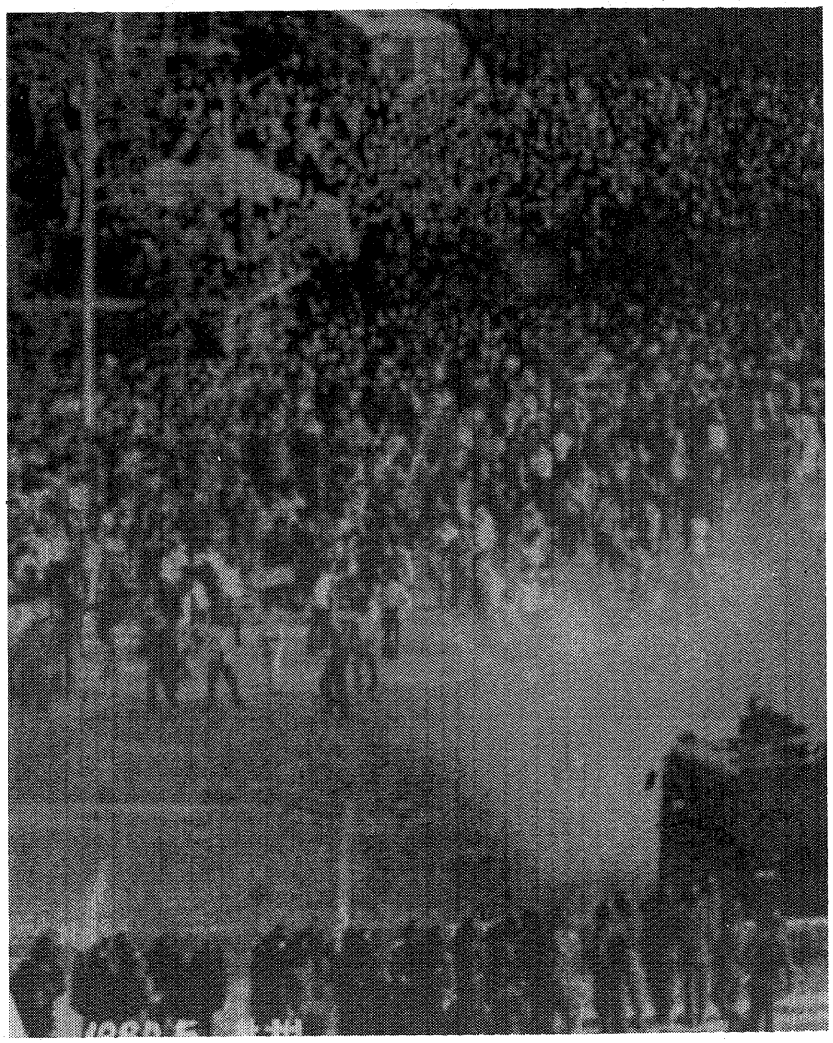
樹々のみどり



1983

京都大学同学会



故　　郷

高　　銀

もうわれわれには
生まれたところが故郷ではない
育ったところが故郷ではない
山と野　走ってくる
私たちの歴史が故郷だ

そうして風満ちあふれた日
私たちが倒れるところ
それが故郷だ

われらよ　われらよ
すべてみな　その故郷へ行こう
母が待った
母がいた歴史が待った
その故郷へ行こう

詩集「暁の道」　より

1980年、街に春の風が満ち溢れる5月の韓国光州。民主化を求める学生、市民に対する戒厳軍・機動隊による過剰弾圧に端を発して、武装し、反撃する市民は遂に軍・機動隊をたたき出し5日間にわたって光州市全域を制圧し続けた。

彼らの斗いは独裁者全斗煥によって血の海に沈められた。しかし、今なお「革命の街・光州」は、その胎動を脈々と続けている。

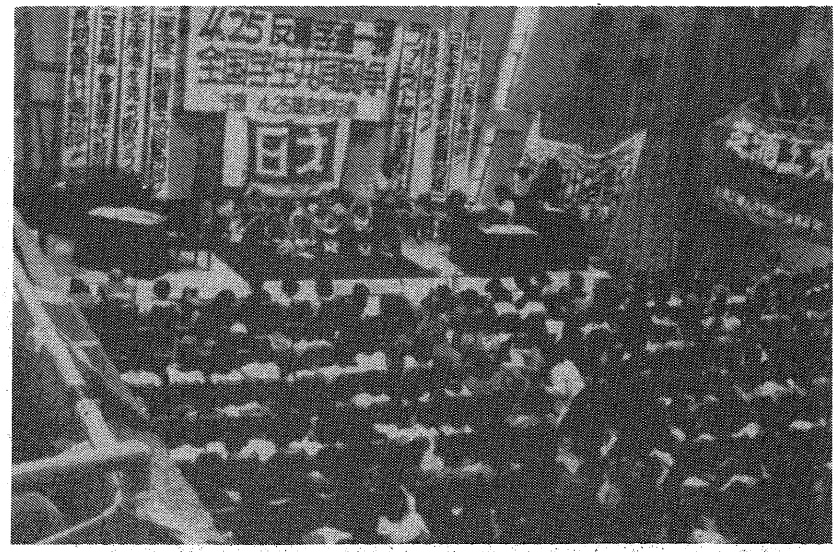
×　　×　　×

人民は土の中に埋められたかに見える
しかし　とうもろこしは大地に根ざし
その不屈な赤い手は　沈黙をつき破る　　（パブロ・ネルーダ）

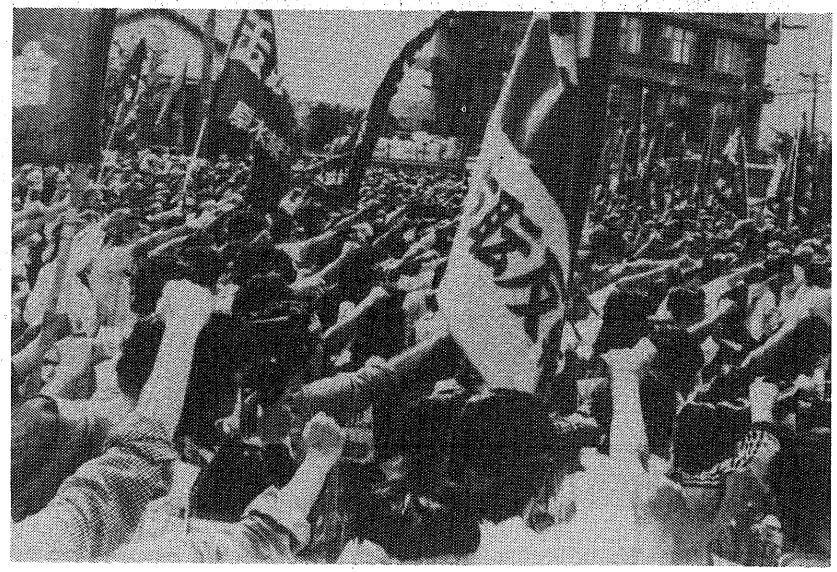
×　　×　　×

忘れてはならない。かの中曽根が首相就任後訪ねた初の海外の人物こそはかの血ぬられた独裁者全斗煥であり、彼が「日韓新時代」を吹聴していた事を。忘れてはならない。韓国の学生達が日本帝国主義打倒を高々と掲げ、斗っている事を。

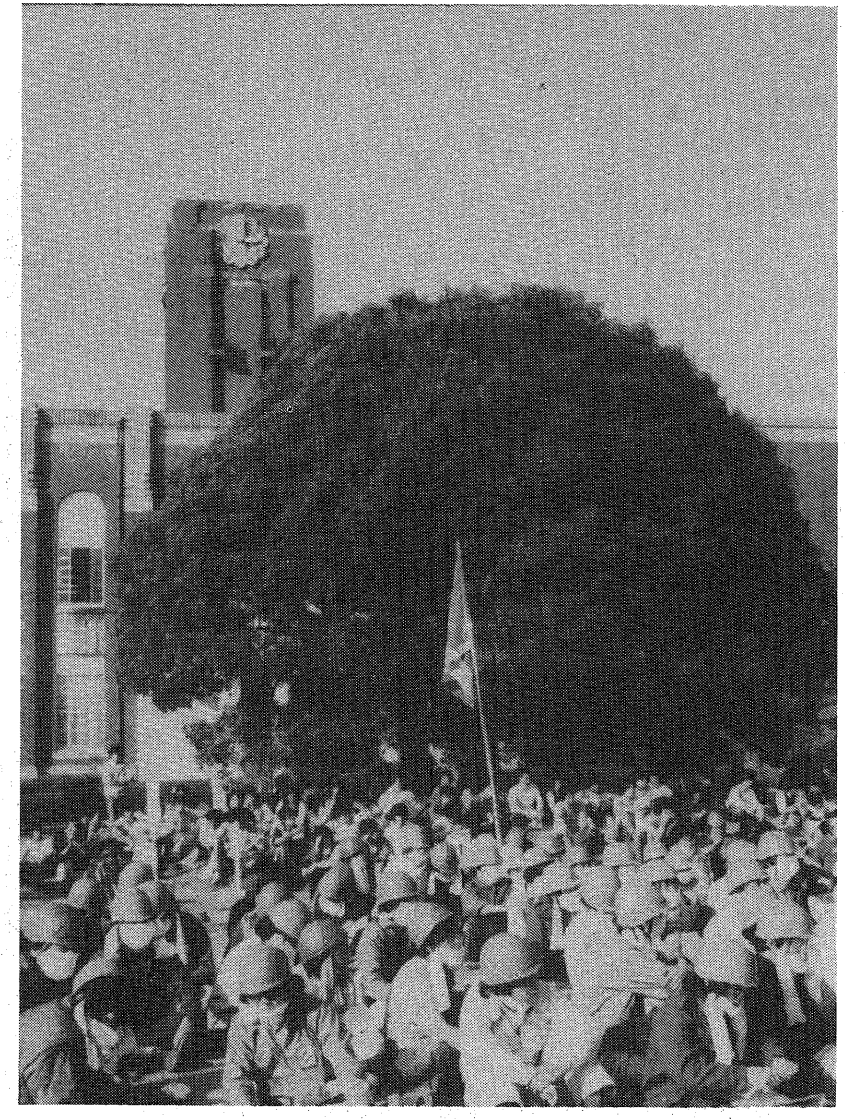
彼らの斗いと、斗って流された血の色を決して忘れてはならない。



社会全体の右傾化の中で，ファシズム学生運動が台頭し，闘う部分への武装襲撃を加えている。彼らファシズム学生運動を解体すべく４月２５日，全国から学友が集まった。写真はアピールする同学会の学友。



悪魔の元素＝プルトニウムを燃料とする高速増殖炉もんじゅ建設強行の為の欺瞞的「公開ヒヤリング」。これを粉砕すべく７月１～２日，全国の労学市民は敦賀に決起した。同学会は５０名の隊列でこれに参加。



１０月２１日の国際反戦デー，全京都の学友３００名によって反戦集会が闘われ，10・31伊丹反基地闘争，１・11中曽根訪韓糾弾闘争など，日米韓安保体制打破にむけた陣型が築かれていった。

12月14日，京大の「最高議決機関」＝評議会は一方的・抜きうち的に吉田寮在寮期限「決定」（＝廃寮「決定」）を行なった。写真は，当日この「決定」に抗議する寮生・学生の怒りの隊列。

従来の学生部の団交拒否路線を覆し，５年振りに克ち取られた１月28日，神野学生部長団交。（写真上……熱気に溢れる法経二番教室，写真下……寮生との確約に署名する神野）

四　月

4・5　機動隊を導入しての大阪大学宮山寮に対するガス・電気ストップ・強制廃寮を阻止すべく京大からも支援。阪大寮決戦勝利全国集会（於大阪）

4・20　反憲学連一掃全国学生共同斗争（渋谷山手教会）

4・25

五　月

欧州から日本へと盛り上る反核斗争に呼応し反戦、反核ー反安保・反原子力を掲げ学内運動を行なう。

5・10〜　「世界人民は勝利する！」と銘うった諸企画（展示・映画・スライド上映、山川暁夫氏講演会など）

5・20　文学部学生大会。21〜27ストライキ案採択

5・20　農学部学生大会。21〜28ストライキ案採択

5・22　反核と日韓をむすぶ東京行動（芝公園）

5・23　石川一雄氏不当逮捕19周年糾弾・狭山中央斗争

5・23　平和のための東京行動・ティーチ・インの広場で京大5・22ー23実行委他の呼びかけで独自ティーチ・イン

5・29　刑法法制審答申八周年糾弾・刑法「改正」保安処分導入阻止・全関西学生集会（同志社大）

六　月

先月に引き続き反戦反核の具体的な斗いを展開。

6・10　七三一部隊を撃つ医学部討論集会

6・13　核も安保もいらない京都集会。この時のデモで学友1名不当逮捕。

6・30　三里塚（成田）空港粉砕・全京都学生集会（同志社大）

七　月

7・2　高速増殖炉もんじゅ「公開ヒヤリング」阻止斗争。

7・4　三里塚現地斗争。

7・12　京大熊取原子炉実験所二号炉の強行着工「承認」を許さない為の大阪府審議会包囲・監視行動。更に8月にも多数の地元住民の参加を得て、審議会への圧力行動を克ち取る。

九　月

夏休み中、当局が抜きうち的に行なった教養部内各所への、ステッカー貼り防止剤ザクロン塗布などの言論弾圧に対して反撃戦ーいわゆる「ザクロン戦争」を斗う。

9・4　教養部事務長追及

9・10　教養部生活連絡委員酒井追及

9・18　教養部長渡辺団交

9・30　三里塚空港粉砕・京都三大学集会（於京大）反対同盟来学講演

十　月

様々な反戦の斗いを創り出すと共に、学内では吉田寮・熊野寮などの学寮に対する廃寮化攻撃が焦点化。

10・11　三里塚現地斗争。

10・12　「吉田寮廃寮・学寮『正常化』」を内容とする文書が北川学生部長名で出される。

10・20　文学部学生大会。21ー27ストライキ案採択

10・21　京都学生反戦集会（於時計台前）

10・24　反核・平和のための大阪行動

10・27　廃寮化攻撃粉砕全学集会　吉田参道で学友一名不当逮捕

10・29　27の逮捕の件に関して学内五ヶ所不当捜査。この時も、機動隊のテロ・リンチによる重傷者が出る。

10・31　寺尾差別判決八周年糾弾・狭山中央斗争。

10・31　自衛隊記念行事糾弾・伊丹中部方面総監部前行動

十一月

前半　10・12北川文書に反撃する署名等の活動。10・27ー29不当弾圧を糾弾する情宣活動を展開。

11・20〜23　11月祭（京大の学園祭）「どぶろくを作って飲もう」などユニークで多彩な催しが繰り広げられる。

十二月

廃寮化攻撃が急テンポで高まる。それに応じて寮生・学生の斗いも先鋭に。

12・13　新学生部長神野による一方的な寮問題「説明会」をピケで阻止。

12・13　寮問題についての教養部討論集会

12・14　評議会（学内最高議決機関）による吉田寮在寮期限の抜きうち「決定」。ゲバルト職員は、抗議する学生を時計台内の階段から3mも突き落とす（骨折者多数）。

12・19　在日韓国人犯金元重君完全釈放・社会安全法適用阻止全国集会（於円山屋外音楽堂）

12・26　釜ヶ崎越冬斗争突入決起集会

一月〜

12・14「決定」への反撃戦が全学的に燃え広がる。

1・11　中曽根訪韓阻止緊急抗議集会（教養部正門前）

1・18　寮生7名、廃寮化攻撃に抗して22日迄のハンストに突入

1・24　寮・学費を考える講演集会　講師・清原正義氏

1・25　第一回文学部長服部団交

-1・28　第一回学生部長神野団交（六百名の学生が結集）

2・3　第一回教養部長渡辺団交（三百名の学生が結集）

2・4　第二回文学部長服部団交

2・5　理学部長山口団交

2・7　第二回学生部長神野団交

2・10　第二回教養部長渡辺団交

2・11　日本原（岡山県）反基地現地斗争

2・14　第三回学生部長神野団交

2・18　日共ー民青による「暴力事件デッチ上げー告訴」のため学友一名不当逮捕

2・21　学生部長神野、確約破棄・団交拒否文書を各寮委員会あて送付

2・22　神野文書に抗議すべく対評議会実力ビラまき

2・25　農学部長深見団交

3・1　部局長会議（評議会に準ずる審議・了承機関）への監視行動

3・3　時計台総長室前集会

×　×　×　斗いは続く！

〈写真説明・学生弾圧の頭目、学生部次長建本（下）と京大総長沢田敏男大先生（上）。彼の口ぐせは「総長の退去命令ダゾー！」〉

目　次

あいさつ
新入生諸君へのあいさつ　同学会中央執行委員会委員長　中河由希夫　10

特別アピール
新入生の皆さんへ　吉田寮自治会　熊野寮自治会　11

各学部自治会、戦線および部局からのアピール
共有してゆくこと、積み重ねてゆくこと　農学部自治会　13
文学部自治会の直面する課題　文学部自治会学友会　14
'82年度活動報告　経済学部自治会同好会常任委員会　16
工学部の抱える諸問題　管理強化に反対する工学部有志　工学部自治会再建準備会　17
新しい仲間たちへ　理学部団交実行委員会　18
新入生諸君へ　教養部団交実行委員会　19
民衆の医療をめざして　医学部学生・有志若手医師　21
同学会文化部から新入生諸君へ　同学会文化部　22

各闘争委、サークル、研究会からのアピール
新入生諸君へ　三里塚闘争委員会　23
刑事法研究会よりのメッセージ　刑事法研究会　24
被爆朝鮮人に国家補償を！　原水爆禁止問題研究会　25
過去の侵略を許さず、新たな侵略戦争を阻止しよう！　京大女解放研究会　26
優生保護法〔改正〕攻撃を粉砕しよう！　京大反原発学習会　27
地元住民と連帯して熊取二号炉を阻止しよう！　狭山―久世を闘う会　28
差別を許さない実践を！　京大コンピュータを考える会　29
コンピュータ社会を撃て

新入生諸君へのあいさつ

82年度後期同学会中央執行委員会委員長
中河由希夫

新入生諸君！君達は、入試という「ふるい分け競争」から解放された喜びと、大学生活を含めた未来への希望で胸が一杯だろうと思う。しかし、現在、たいへんな時代を迎えてしまったことを銘記してほしい。総動員されたマスコミが虚構の未来像を描こうとも、諸君が、今までの「日本社会の繁栄」の永続に期待をかけようとも、我々が歴史の転換点を迎えている事実に変化はない。

73年以来の不況は出口を見い出せぬまま、記録上最高の失業率が発表される一方、日本列島を「不沈空母」と化すべく中曽根が登場し、自動車、電機などの「基幹産業」は10年後の主力生産部門として兵器分野への進出をはじめた。

隣国の韓国では、民衆の怒りが数千、数万人のデモによって表現され、全斗煥軍事独裁政権と日米帝国主義による新植民地支配は、屋台骨が揺らぎ、もはや凶暴な姿を隠すことができなくなっている。

このような情況の中で、昨年4月、C級戦犯総長沢田は、入学式の席上、新入生を前にして、「国家社会に感謝し、その成果を国家社会に還元すべく学問に励め」と国粋右翼まがいの訓示をたれた。この言葉は、現在の「たいへんな時」だけを背景に出てきたものではない。諸君がその一員となる京都大学自体が、設立当初から持っていた「帝国主義大学」としての本質を如実に示すものである。

京大において、様々な闘争を全学的に展開し、帝国主義と京都「帝国主義」大学の批判を行なってきた同学会は、再建10年を迎えた。日「共」－民青による十数名にのぼる学友への大量告訴を糾弾し、全学友の手によって真紅の闘う同学会が再建されてから、我々は、研究教育体制の内容を実践的に批判し、闘いを押し進めてきたのである。

平和・安住の幻想がふっとんだこの「たいへんな時代」にあって、諸君の若いエネルギーは、大学当局の「管理」「秩序」そして「学問」などという獄舎には納まりきれないだろうと思う。

「さあ　行こう。
夜明けの熱烈なる予言者として。」

同学会再建宣言は、最後にこう呼びかけている。そして今、我々も同様に諸君に対して呼びかけたい。

「ともに、人民の歴史を切り拓く道を！」

新入生の皆さんへ

吉田寮自治会
熊野寮自治会

新入生の皆さん！皆さんは受験の重圧から「解放」され、大学での「自由」な生活を思い描いていられるかもしれません。あるいは、「学問」にうちこもうと、決意を固めている人もいるでしょう。

我々は、今、様々な思い、期待をいたしているであろう皆さんを、〝自治〟を共にになう仲間として迎え入れたいと思います。

我々の寮は、大学の厚生施設として存在しますが、我々の手によって自主管理が行われています。入寮選考を寮自治会が行うというのはその一例です。このような寮の自主管理は、全学の学生・教職員の支持を得て、現在まで維持されてきました。入寮のいかんに係わらず寮の自主管理・寮自治を支えていくのはすべての学生の力です。

寮の運営を大学当局の手に委ねる事なく、寮生自身が行っていくというのは、我々が歴史的に獲得した権利です。そして、寮という共同生活の場に於ては、自主管理は欠く事のできない条件なのです。我々は、寮内の様々な問題について、その都度、全寮の討論を踏まえて解決しています。それは、あらかじめ決められた規則に従い、機械的に問題を処理する事と異なり、自由な討論と率直な相互批判をその前提とします。我々は、同時にこのような討論を通じ、寮生どうしの全人格的な理解をつくりあげようと努力しています。また、寮自主管理は、我々の自由な活動の基盤でもあります。

我々は寮自主管理を、今後とも続けていくべきだと考えています。しかし、現在文部省が学寮に対してとっている方針は我々の考える寮のあり方に逆行するものであると言わなければなりません。文部省の寮に対する方針は、明らかに寮生による自治を排し、大学当局による寮生の直接管理を目指すものとなっています。その典型的な例として「西の筑波」といわれる大阪大学の新稲寮をあげてみましょう。この寮は、定員40人程の小さな寮ですが、4つのブロックに分断されており、寮生どうしの交流が物理的に困難にされています。また、寮外生との面会も、寮内では、監視付きの「面会室」に限られています。そこには、寮生－寮外生の交流を困難にして、寮生を「隔離」し、ひとりひとりを完全管理下に置こうとする大学当局の意図が明白に表れています。また、寮自治会を結成する事は認められていません。こうした状況のもとで、寮の自主管理がのぞめないのは当然の事です。

寮自治を否定しようとする動きは、この京大にも存在します。昨年12月、京大当局は、全く一方的に86年3月には吉田寮を廃寮にするという「決定」を下しました。当局はこの「決定」を「古くなった寮を建てかえる事を決めたのだ。」と言っています。けれども、建てかえ後の新寮のプランは一切明らかにされていません。当局の狙いは、むしろ吉田寮を一時的に閉寮にしても、寮の自治権をうばい去ろうとしているのです。我々は、この「決定」に対し抗議の意志を表明し、「決定」の撤回を要求しています。また、自分の生活する寮を、自治寮として残していく事が、新入生の皆さんに対する我々の責任であると考えています。

また、現在、経済的弱者に対する厚生施設としての寮の意義を根本から破壊しようとする方針を文部省はとっています。皆さんも行革の名のもとで、文教・福祉予算が切り捨てられている事は御存知でしょう。その一つのあらわれとして、今まで国庫負担であった寮にかかる水光熱費等が、寮生負担へと転嫁されようとしています。文部省や大学当局は、「寮に入っていない学生は水光熱費は自分で負担しているのだから、寮生もそうしなければ不公平だ」という言い方をよくします。しかし、本来寮は貧しい学生も大学で学びうるために、厚生施設として建てられたものです。そう考えれば、こうした言い方があてはまらないのは明らかでしょう。我々は、一月から3回に渡って、水光熱費等を寮生負担にしようとしている大学側と、団交をもちました。大学側は一度は「寮生負担とするかどうかは話し合いによって決める」と確認を交わしておきながら、その後、「確約は破棄する」という姿勢をとるに至りました。この問題については、今後も大学側に働きかけ、経費の寮生負担という方針を撤回させていこうと考えています。

新入生の皆さん！「教育の機会均等」を実質的に保障し、また自由な批判に基礎をおき、〝自由に学ぶ権利〟を守っていくためには、我々の自治が不可欠です。我々は、寮の自治が寮生だけの手で行われているとは考えていません。それは、全学生の力によって支えられています。皆さんの我々の活動への支持、ひいては我々の寮への入寮を、最後に訴えます。

共有してゆくこと、積み重ねてゆくこと

農学部自治会

新入生の皆さん、合格おめでとう。何らかの期待をもってこれからの学生生活をおくろうと、ウキウキとしている諸君の姿は、かっての我々自身を振り返れば想像に難くない。そして同時に、やがてその期待というものがはなはだ茫然としたものにすぎず、たちまちにして心の整理つけざるを得ない事態に当面するだろうことも。確固とした〈何か〉を目指そうとすればする程、それは急速に訪れるにちがいない。社会状況、大学をとりまく状況は、具体的事実を通して日常的に個々人につきつける程激動しているのである。

首切り、合理的、減反・開発など、不況とインフレの同時進行という終末期的危機の中にタタき込まれた資本家は、労働者・農漁民を犠牲にした収奪の強化によって生き延びようとしている。スクラップ・アンド・ビルドなど産業構造の転換を押し進め、失業者は実質四〇〇万人にも達し、一方で農漁業は独占資本の従属下で生産と生活を破壊され、出稼ぎ・兼業化が大勢を占めるに至った上、その残された生活の糧を得る道すら閉ざされつつある。'70年初頭より全国各地で爆発してきた反原発・反「公」害住民闘争や、工場占拠ー自主管理闘争は、現実の生活の上で生産活動を資本家の攻勢をはねのけて闘われる攻防戦なのである。しかも、国家権力の直接的介入・「合法的」暴力の強圧的介入という文字通り権力の壁と対峙した闘いとしてあるだけに、三里塚闘争に見られるごとく、全国の闘いを結びつけて闘われている。賃上げ闘争すら組めなくなったと言われて久しい労働運動も、三里塚と結ぶ動労千葉がジェット燃料備蓄ゼロを目指す闘いを貫こうとするなど、労働運動の階級的戦列の強化を克ち取らんとしている。まさに歴史を発展させるのが労働者農漁民を主体にした階級闘争にほかならないという命題の復権をなし就げつつある。

毎年のように我々は、自治会運動あるいは学生の諸活動こそは、学生の特権擁護の運動に堕してはならず、このような様々な領域での闘いが提起するものをうけとめ、そこで闘う人々と連帯しなければならないことを、新入生諸君にまず訴えつづけている。そして再度諸君に対し、まずそのことを訴え、また、どのような学生生活をおくり、どのような人間として生きて行くのかを問い続けるだろう。学生運動が停滞しているかのように見える今日にお審

いてさえ、そのような問いかけは我々と諸君との間の共有出来得る問題であるだろうし、しかしまた、そこからしかはじまらないだろう。

日増しに管理強化は、学生に対する直接の締めつけや、建物を媒介として学生を単なる利用者に落し込める形で進んでいる。産業の要請にのみ従属した教育研究体制の再編が進んでいる。こんな窒息しそうな状況だからこそ、我々はその根本的な問いを発し、共有するものを一つ一つ積み上げねばならないと考えるのである。

文学部自治会の直面する課題

――文学部自治会学友会――

一回30分やそこらのニュースで余す所なく真相を伝えるには、社会はあまりに深大な矛盾に満ちている。中立を標榜するマスコミによって、我々は当事者間の緊張のうちに推移する事態から無限に遠ざけられる。それとともに、社会的〝良心〟を一身に体現すると称する報道機関への限りない委任によって、我々はもはや自分の思考と言葉とを失なっているのにもかかわらず、感情的になっている当事者間の拘泥を超越して、事態の公平な判断に参与する特権に浴しているかのような幻想をもたされてしまうのだ。例えば原発建設に向けた地元公開ヒアリングの開催をめぐって推進側と反対側との衝突が報じられ、両者の見解が要約された後では、我々は原発政策そのものの問題性にまで溯る材料は与えられないまま、ただ事態を眺めやる者の立場として、〝理性的な解決〟といった見解を抱いて、事態を〝片付け〟てしまいかねない立場に置かれているのである。

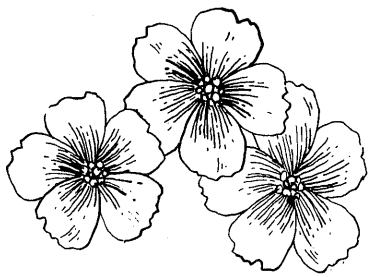
情報化社会としての現代とは、まさに報道のこのような特性に象徴されるように、事態に対する主体性が根こそぎにされ、伝達の量と回転率のみが志向される、主体の全面的な危機の時代なのである。情報に対して、ものわかりよく適応すること、このことが、解決されるべき矛盾から人々の注意を奪っていくのである。

ところで情報を握っているのは誰か、何のために情報が流されるのかという問いが答えられねばならない。このことが見定められない限り、情報から締出された社会の矛盾の中に、自己と社会の真の像を救い出しに行くことは覚束ないだろ。しかしこの問いに誰が明確に答えられるだろう。

だが確かなことが一つある。それは情報から締出されている矛盾に接近していくにつれ、もはや我々は現実の表層でとり交されてきた、もの分かりのいい言葉では何一つ語ることができなくなるということだ。その時こそ我々が情報の送り手に委任してきた言葉を自分のために取戻さねばならない時間が拡がっていく。

日韓斗争、反核反原発、三里塚斗争、あらゆる社会的差別に抗していく斗い、これらの斗いを通して文学部自治学会学友会は、情報から締出された諸矛盾に直面し、自分の言葉、そして自分たちの言葉を克ちとっていく活動を展開してきた。これらは現体制が、自身を維持するために人民に強いてきた諸矛盾に直面する斗いである。学内においては、教育の国家管理、産学協同化と斗う斗いが続けられている。昨年文学部自治会では、東大において学生活動家の処分を画策してきた反動教官今道の集中講義への来学を阻止した斗いをはじめ、寮の自主管理に連帯して廃寮化攻撃と斗ってきた。今年一月には諸自治会、団交と呼応して学部長団交を行い、寮自治を無視して廃寮プランを実施せんとする大学当局、学生部の犯罪性を暴き、孤立させる斗いを展開してきた。このようなさまざまな斗いの方針を、我々は年二度の学生大会において衆議決定し、原則的な自治会活動を守って斗っている。

我々がさまざまな思いを抱いてたずさわる斗いは、前述したように、情報化社会の主体性喪失に抗する斗いであり、自分の言葉を模索する斗いでもある以上、我々はそれに綱領的字句をあてがうことを好まない。ただ我々の斗いは、さしあたって沈黙を強いられるとしても、情報によって水路づけられた適応を通じて、自らの内的真実を安価に売り渡すことを潔しとしないものなのである。



'82年度活動報告

経済学部自治会同好会常任委員会

☆**新入生歓迎行事**　入学式の後、京大会館において新歓ガイダンス・茶話会を行なった。

京都教育文化センターにおいて新歓映画会を開き、「ロミオとジュリエット」および「ソドムのハムレット」を上映した。

☆**十一月祭**　「釜ケ崎から」講演会、廣松渉（東大）講演および平井俊彦（京大）との対談、レニ・リーフェンシュタルをテーマとした、「民族の祭典」上映および平井正（立教大）の解説・講演、坂本賢三（神戸商船大）と佐和隆光（京大）の対談、栗本慎一郎（明治大）講演を行なった。

☆**教科委団交**　経済学部創立以来の不合理であった専門過程における法律科目必修制度の撤廃を、学部当局とのたび重なる交渉のすえかち取った。

☆**施設委団交**　身障者のために経済学部の施設・設備の設置・改善について交渉し、早期実現の確約を得た。E地下自主管理に関連した物質的保障をかちとった。

☆**平田清明（経済学部長）団交**　学内への機動隊導入等の自治破壊行為によって全学的に追放決議のあげられている「原理研」＝『京大学生新聞』からのインタビューに平田学部長が応じたことに対してその責任を問い、『京大学生新聞』の正体を知らなかったことおよび知っておれば応じなかったことを確認し、それらの団体には今後一切協力しないとの確約を得た。

☆**釜ケ崎日雇労働者への支援・交流**　資本主義社会の矛盾・抑圧を集中的に被っている釜ケ崎の日雇労働者のたたかいを、メーデーや越冬斗争への参加を通して支援するとともに、十一月祭での講演を依頼するなど、交流を行なってきた。

☆**その他**　秋には恒例の学部ゼミ紹介を行なった。

11月祭で講演する栗本慎一郎
（明治大教授）

工学部の抱える諸問題

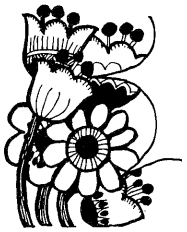
管理強化に反対する工学部有志
工学部自治会再建準備会

工学部は明治時代の西洋化政策の中で創設されて以来、国家の産業政策に基づいて、様々な学科が増設され、今や大学最大のマンモス学部に肥大化している。ところが、国の産業政策、とりわけ戦後の農業切り捨ての工業立国政策がもたらしたものが、様々な公害問題であり、現在的に言えば、原発問題やコンピュータ問題である。そして現在の大学、とりわけ工学部は、国家の技術立国政策のもとにますます産学共同体制を強化しつつある。例えば、ここ数年間、研究室の研究費が据え置かれる一方、科研費（科学研究費補助金）による文部省の研究支配が強まっている。また、企業による委託研究が年々盛んになっている。そして、産学共同―反人民的学問研究の最大の表れとして、大阪府泉南郡の京大熊取原子炉実験所の存在がある。実験所は日々放射能をタレ流しながら、国の原発推進政策に加担する「研究」を行なっているのである。

このような情況のもと、我々学生に対する大学当局による管理強化が行なわれている。昨年の教養部におけるステッカー貼り弾圧、また工学部におけるカリキュラム再編、必修単位制復活などがそれである。これらは、我々を単位にしばりつけることによって、また情報伝達のメディアを奪うことによって、我々の自主的創造的活動を圧殺しようとしているのだ。だ

私達はこの間、管理強化に反対し、このように様々な問題をかかえる工学部の問題を考えてきた。また現在、学寮4寮に対する大学当局の攻撃は非常に熾烈さを増しているが、大学の自治を守り、管理強化に反対する立場から寮闘争に連帯してきた。

我々は、皆さんと共に、大学のかかえる問題について考え、工学部における自治会運動の活性化を図ろうと思っている。



新しい仲間たちへ

理学部団交実行委員会

昨年12月14日、全学の評議会は寮生の声を聞くことなく吉田寮の在寮期限を「決定」しましたが、理学部からは学部長、評議員の三名の教授が参加しています。一方、学生部は、熊野寮の暖房を入れなかったり、吉田寮の雨もりを放置したり、寮食堂をつぶそうとするなどの脅迫手段によって、水光熱費負担区分を強要しています。この根拠のひとつとされる学寮『正常化』＝『基本方針』を理学部長も「了承」したことになっていました。「リベラリストで通っている三教授がなんということを」とか、「このままでは許せん。本人の責任を問う」ということで、理学部生数人で研究室を訪ね、評議会『決定』への参加などについて問いただしてきました。

年が明けて、文学部や教養部では学部長と団交をするという話を聞き、「理学部でもやろう」と寮生と、いっしょにやってきた下宿生が呼びかけて理学部団交実行委員会がうまれました。理学部には一応、理学部自治会（S自）があるので、S自評議会として学部長団交をやるように要請し、一評議員が議案を出しましたが「選挙で忙しいので力がまわせない」という多数派の反対で否決されました。昨年12月の学生大会で「負担区分の強化に反対」の決議をあげていながら、S自執行部は団交を放棄したのです。

私たちは急きょ、理学部学生（学部課程）の署名を集めて直接に団交を要求することにし、1月下旬の間で一七〇余りの署名を集めました。講義も終りかけて学生の少ない時期でも、実験に忙しい学生が周囲の署名を十いくつと集めたりするものです。こうして、2月5日の理学部長・評議員団交を90名の参加で勝利し、四つの確認書をとりました。

その後2月7日の学生部長団交が寮自治会側の大勝利となり、窮地に追いこまれた学生部が神野部長を居直らせ、2月14日の法外な「話し合い条件」の要求、2月21日付の確約「破棄」通告と、自治も民主的手続もかなぐり捨てて、むちゃくちゃしてくるのに対して、部局長会議や学生部への要請・抗議行動などで、ほかの学部の学生、寮生とともに私たちも闘ってきました。今後とも4寮自治会に連帯して理学部のなかで寮闘争を闘っていきます。また理学部学生の真の利益を『この時代のなかで自然科学に関ったどんな労働者たらんとするのか』というところから把えなおし、理学部の教育・研究を問い、自治を闘い取っていきたいと考えています。詳しくは自主パンフレットにて。

新入生諸君へ

教養部団交実行委員会

4月の柔らかな風に運ばれる「学問の心地よい香り」に鼻をくすぐられ、快感に身をゆだねている（であろう）新入生諸君！もう一度鼻に神経を集中してみてはくれまいか。「地獄」からの「解放」と、「春」の「喜び」に、諸君の嗅覚は麻痺しているかもしれない（私もかってそうだった）。

しかし、何か臭ってはこないか——誰もいない教室の隅の方から、研究室の扉の向うから、時計台の内側から……何か感じはしないか？——講義が終わり立ち上がり、軽いめまいを覚える時、操作する手をふと休め実験台から窓の外を見やる時、便器にしゃがみふっと一息ついた時……

その時諸君は気づくだろう。「学問の香り」に混じるあるかすかな腐敗臭、死体にそえられたすえた菊のごとき臭いに。その臭いはだんだんと強さを増し、やがて諸君の全身をつむだろう（あるいはそのまま感じなくなるか）。我々はこれを「学問の香りサワダー」と呼んでいる。余りにも栄養のあるものを食べすぎ、とてもじゃないが消化しきれないでいる某京大総長の「ウソ」も恐らくこんな臭いがするに違いない。

そうして、「学問の香り」をふりまきながら、京大が何をしてきたかが明らかになるだろう。C級戦犯某が総長だとふんぞり返り、七三一部隊の生き残りを臨時講師として招こうとする大学。「原発安全」をふれまわり企業から「委託研究」の名で礼金を受けとり、認定基準を改悪し水俣病患者を切り捨て、安保改定・憲法「改正」に奔走する教授たち。これが京大なのだ。そこで行なわれているのは「学問のための学問」でも何でもなく、まさに「資本のための学問」である。法学部では、民衆をいかに支配するかが教えられ、農学部では、第三世界からの効率的収奪を研究する熱帯農学講座が新設された（十分機能してないが）。工学部で研究される原子力、情報・航空工学——合わせれば核兵器のできあがりだ。京大は「反戦自由の砦」などでは毛頭なく、「学問の香り」はまさに「死の香り」である。

大学は化けの皮をはがされるのを恐れている。学生が「学問の香り」の本質を敏感にかぎつけるのを恐れている。

諸君は見るだろう。黒板の両わきにパラフィンが塗布されているのを、ステッカー（我々の表現手段）が「黒板の使える面積を

減らさない」ように。ところがそこは、チョークでも書くことはできない。当局自らが黒板の使える面積をわざわざ狭めているのである。この意味のなさ？

諸君は反発を覚えるかもしれない。しかしステッカーは黒板に貼ってこそ意味がある。黒板は、「学問」が大学から学生に「授与」される媒介として存在し、大学を大学として機能させるものである。それゆえ我々は、「大学」そしてそこで行なわれる「学問・研究」に対する根幹的な批判の意を込め、黒板にステッカーを貼っているのである。

我々学生のそうした根底的な批判の眼を恐れるがゆえに、当局は学生の自主的・創造的活動に対する弾圧を年々強めている（資本にとって役立つ「学問」を我々に押しつけようとしている）。単位制強化、夜間ロックアウト、ステ貼り弾圧、サークルBOX棟つぶし。そして、そういった攻撃の中で現在最大級のものが、寮に対する廃寮化攻撃である。

寮は寮自治会によって自主管理されている。寮生の生活・文化・教養・政治などあらゆる活動の自由が保障された自主的・創造的空間である。そこでの活動は必然的に社会の矛盾に眼を向け、現体制に対する批判へと向かう。それゆえに大学当局は寮自主管理を否定し、自治寮をつぶし、当局による学生管理の徹底したいわゆる新々寮に作り変えようとしているのである。これは、教育における資本の代弁者である文部省の方針の下、全国的に推し進められている。この新々寮化攻撃に抗し、吉田・熊野寮をはじめとする4寮自治会は一環して斗ってきた。過去の斗いにおいて、入退寮権、水光熱費の当局負担を克ち取り、寮食堂を守り抜いてきた。そしてこの斗いは、決して現寮生の権利擁護に止まるものではない。人間の全人格発展の手段である教育を投資とみなし、人間を単なる労働力商品におとしめようとする資本との斗い、全ての者に大学を開放するという当り前のことを実現するための斗いであった。

その斗いに応え、廃寮化に加担してきた教養部長渡辺との団交を克ち取るべく、教養部団交実行委員会は結成された。わずか一週間で団交要求署名七五〇を集めきり、渡辺を引きずり出し、廃寮化に加担した彼の責任、学生部当局の不当性を全学に暴露した。各学部においても学部長団交が克ち取られた。この全学団交戦の嵐は、寮つぶしの最高責任者神野学生部長を完全に包囲し、2月7日の学生部長団交において、「寮生の合意なしに負担区分（水光熱費を寮生が払うこと）という歴史的勝利を獲得したのだ。ところが、論理的に破綻した神野はメンツをかなぐりすて、ハレンチにも、「確約破棄、話し合い拒否」を宣言。事態は楽観を許さぬまま現在に至っている。話し合いから逃亡した当局に義はない。最終的な勝利は我々の手にあるのだ。

京大工場に投げ込まれた新たな原料諸君！　ベルトコンベアからとびおりて自らの道を歩むのか、それともそのまま「巨大な意志」に推し流されていくのか、諸君の意志次第である。

我々と共に斗おう！

常に敏感な嗅覚を保ち続け、真に「人民のための学問」を創り出すために。

「秩序」の心地良さに身をまかせるうち、気がつけば、一つの商品「小サワデー」として、自らを資本に売り渡し、人民支配の道具として、使い捨てられていた、などということのないように。

民衆の医療をめざして

医学部学生
若手医師・有志

現在の医学・医療技術の「進歩」は、目をみはるばかりである。わからなかったことが次々とわかっている。ME機器や、新しい検査で診断もどんどん正確になっている。新しい薬や治療法で、直らない病気はないかのようである。

ぼくも、入学したてのころは、こう思っていた。しかし、学部一回生の頃どうも違うらしいと気付きはじめた。

学Ⅰには「医学入門・Ⅱ」というのがある。これは学生が主体的にプランをたて、医療被害者、薬害被害者の人たちに講師として自分たちの体験、更には、そこから得た現代医学に対する批判を話してもらおうというものである。被害者たちは、自分たちの苦しみ、悲しみ、怒りを噴き出すように語る。彼らは、医療の矛盾を集中してあびた人達であるから、現在の医療の矛盾点を最も鋭く、指摘できる。

そのなかでぼくがようやくわかってきたことは、医療過誤（斉藤病院事件、富士見病院事件など）、薬害（サリドマイド、スモン、クロロキンなど）が思ったより、多発していること。また単なるミスというものではなく、どの事件でも同じような原因でおこっている構造的なものであること。だから、自分一人が良心的な医者になることは解決しないと思う。

現在、医療過程、薬害はあまり人目にふれなくなったが、同じように多発しているのである。ちょっとした病院なら医療過誤の一件や二件は抱えている。薬害も大量発生しないが、散発している。また、大鵬薬品の発がんデータかくし、日本ケミファのデータ偽造など記憶に新しい。

そして、「医療そのものが健康に対する重要な脅威になりつつある」（イリッチ）とまでいわれる。なぜこうなったか、理由はいろいろ考えられるだろう。医師による医学知識の独占、健康へのばくぜんとした不安、薬・検査の過剰投与・医療の産業化、等々。

では、こうすれば民衆のための医療となるのか。今まで模索してきたが、明確にできていない。しかし、患者、被害者と共に考え行動していくことで見い出せるのではないかと、今、思う。

同学会文化部から新入生諸君へ

――同学会文化部――

すべての新入生諸君！　同学会文化部は、京大の学園祭である11月祭を中心として、学友の自主的創造的文化活動を保障し、発展させるために様々な活動を行なっている。昨年の第24回11月祭での同学会文化部企画の紹介を報告すると共に、新入生諸君が、広範かつ多彩な文化活動に主体的に取り組まれんことを訴える。

同学会中央企画の概要は、

☆「帰日政治犯を囲んで」　韓国独裁政権により「北のスパイ」としてデッチ上げられた在日韓国人政治犯の中で、刑期を終えて日本に帰ってきた人もいる。この帰日政治犯のひとりを招き、獄中状況の報告と日韓問題の重要性が話された。

☆「アトムポリスへの動き」　高木仁三郎氏を招いて、日本の独自核武装や核による人民管理をめざして進められている核燃料サイクルについて、映画をまじえて講演会を行なった。

☆「監獄支配を撃つ」　国内治安管理体制の強化に向けて、現在もくろまれている法体系の整備の実態とその本質が暴かれた。

☆「酒づくりは人民の権利だ」　三里塚でユニークな闘いをくりひろげている前田俊彦翁が、どぶろく文化を通して酒税法、三里塚の問題を語った。

☆「被爆朝鮮人補償の視点ＰＡＲＴⅢ」　今回は、台湾人元日本兵に焦点をあて、この問題を通して、日帝の戦争責任についての講演が行なわれた。

☆「狭山事件――18年目の新事実」　石川氏の無実を証明する小名木証言の映画上映と共に、部落差別の現状、問題を討論した。

☆「コンピュータ合理化をうち砕こう」　現在進行するコンピュータ合理化による労働者の分断とコンピュータ技術者自身が受けている人間性を無視した重労働の現状にメスを入れた。

☆「戸籍制度の桎梏を断て」　日本ほど人民の「身分」関係を隅々まで把握している国家はない。その中にある「家」意識によって産み出されている女性差別、「私生児」差別等の問題を戸籍制度と闘う女たちと語りあった。

☆「反戦反核を自らの場で闘おう」　箕面忠魂碑違憲訴訟原告の神坂玲子氏を招き、天皇主義的、反人権的、軍国主義的な忠魂碑の話をもとに、反戦へのとりくみが討論された。

☆「七三一部隊から防衛医大へ」　部隊長石井は京都帝大出身であり、侵略に向けた研究体制は大学の中で未だ受け継がれている。七三一部隊のスライドを通して、現在の帝国主義的大学再編を粉砕する闘いの重要性が討論された。

新入生諸君へ

――三里塚斗争委員会――

新東京国際空港（成田空港）が暫定開港されてから5年が過ぎようとしている。この春、京大のキャンパスを踏む諸君にとっては、成田空港はすでに海外旅行に出発するにふさわしい、新しくて設備のととのった国際空港として定着しているかもしれない。「いのちとくらしを守る」生活協同組合の海外ツアーも三里塚の農民の「いのちとくらし」を奪ってつくった成田空港から旅立つ。

また、君達は「空港」に反対して斗い続けている人民がいることも、時折、新聞の片隅にのる小さな記事で読んで知っていることだろう。'78年の管制塔占拠、'80年の動労千葉のジェット燃料阻止斗争、そして今だに政府・空港公団は反対同盟農民を前に、二期工事に手が出せないでいるということを。さらに君達はそこから、政府・報道が一体となってつくりだす「空港反対派＝過激派」という大キャンペーンを信じているかもしれない。

しかし、第三世界への侵略や、軍事目的を背後にかくし、航空資本があおりたてる海外旅行ツアーという架空の航空需要を口実として国際空港を建設しょうとする政府と、それに反対して斗う農民とのどちらに大義があるだろうか。三里塚斗争は、そのねばり強さと体をはっての実力斗争が全国の共感を集め、今では反原発、反基地・反開発そして差別、抑圧と斗う全国の人民の斗いのシンボル、拠点ともなっている。更に'82年にはフランスのラルザック、ドイツのフランクフルトの反基地反空港を斗う人民とも経験を交流し、国際連帯を実践してきている。

この間、政府・空港公団は強制収用という方法で力ずくで反対運動を潰そうとして、農民の反感をかい失敗した経験にこりて、反対同盟農民の生活基盤である農業経営に目をつけ、「成田用水」「公団用地貸付」を軸とした「農業振興策」によって反対同盟農民を一人一人に分断し切り崩そうという策動にでてきた。しかし反対同盟は「農業振興策」をめぐる内部矛盾を包含しながらも、自らの体をかけて斗ってきた17年の斗いの歴史、そして主体変革の歴史の上に、廃港に向けての格闘を続けている。とりわけ'81～'82年にかけては、政府・公団からの切り崩し攻撃を真っ向からうけながらも、個的農業経営の弱さを、農民内部の討論により克服せんとし、斗う農業建設、自主耕作、一坪共有地再共有化など様々な運動方針をうち出してきている。

我々は、'78年3月26日の管制占拠破壊の斗いを成しとげたような人民の斗いのうねりをまき起こす三里塚斗争に、すべての人民が理解を深め、主体的に斗いに合流してもらうため京大において三里塚と結ぶパイプ役をつとめようと斗っている。

刑事法刑研究会よりのメッセージ

刑事法研究会

新入生諸君、とりわけ、法学部生諸君！　大学は、そして社会は、今、君たちを待っているだろう。皮相な法解釈学を身にまとい、高級労働力商品として磨きがかかるのを。労働者人民を、管理、抑圧するための敏腕を備えた、「立派」な官僚、ハイタレントになるのを。人を牢獄に繋ぐことを喜びとする検察官、国家政策に追従し、人民の姿を省みない裁判官に仕立て上がるのを、我々もまた、君たちを待っている。全く異なる身振りで待っている。制度的知を拒絶し、現実をこそ、学び尽くさんとする学友としての君たちを。法――我々を網目状にとらえ、あくまで既存の体制へと呪縛せんとするもの、言説化された権力――を至る所で切断し、その死を告げるべく奮闘する友人としての君たちを。そして、「民主主義」幻想をかなぐり捨てた支配階級がまさに着手せんとしている帝国主義的法再編、わけても刑事法全面再編と闘う同志としての君たちを。我々刑事法研究会は、法＝国家――市民社会の　在的批判を通じ、ブルジョア的な「法学的世界観」を斥け、マルクス主義的法理論を打ち立てるべく、研究するサークルである。そして、それ故、単なる法解釈、法律文献学習に留まるのではなく、法を巡り、日々進行する現実と対峙する活動を行なっている。具体的には、刑法「改正」、保安処分、刑事・留置施設法として姿を現しつつある刑事法全面再編に抗する闘いである。刑事法再編は、国家刑罰権の飛躍的拡大強化をもって、人民を管理、抑圧し、「精神障害」者、「犯罪」者に対する差別を煽動することによって、人民統合を推進しようとする、社会総体の監獄化の企てに他ならない。これと対決する闘いは、国家による規律、訓練及び監視の一切を拒否し、自らを、人民の未来に向けて大胆に投企し、解き放つことである。

新入生諸君に訴える。「一人一人の友人」を「監視者」にせぬために、願わくば我々とともに進撃されんことを。近々、会える日を楽しみに、我々は待っている。

被爆朝鮮人に国家補償を！
過去の侵略を許さず、新たな侵略戦争を阻止しよう！

原水爆禁止問題研究会

新しい友達に！

「教科書問題」が騒がれたのが昨年夏。どうやら〝騒ぎ〟は〈進出〉を〈侵略〉に書きかえるだけで一件落着したようだ。だがまだ侵略のおとしまえはついていない。

君達は、韓国に被爆者が2万人（推定）もいることを知っているだろうか。広島、長崎で被爆し、朝鮮半島へ身ひとつで帰って行った人々がいることを知っているだろうか。

一九一〇年から45年8月15日（日本帝国主義の敗北の日＝朝鮮解放の日）までの〝日帝36年〟の朝鮮植民地支配により、日本へと多くの朝鮮人が強制連行され、あるいは土地を奪われてやむなく流れて来た。その数およそ二四〇万。（一九四五年8月15日現在）。そして、軍需工場のあった広島、長崎で強制連行させられていた朝鮮人とその家族らは、それまでの日本の生活で、差別され抑圧され酷使され続けていた。8月6日広島、9日長崎に落とされた原爆は平和な街の頭上で炸裂したわけではなかった。中国へ、アジアへ、太平洋へと、泥沼の侵略戦争を続ける日本帝国主義と、戦後の世界体制を自国に有利に導こうとするアメリカ帝国主義の戦略とのはざまに原爆投下はあった。

ここでは、「被爆したから被害者」という図式はなりたたない。それは何よりも、朝鮮人が全被爆者の11％を占めるという事実が示しているではないか。朝鮮人にとっては日本人イコール加害者なのだ。

おととし秋から盛りあがった反核運動は、被爆国という被害者意識からわきおこった。だが、考えてみてほしい。今も韓国には被爆者が、日本政府の国家補償もうけられず苦しんでいて、在日朝鮮人被爆者もまた差別と貧困と病苦の中で苦しみ続けているということを忘れて「唯一の被爆国」と叫ぶ日本の反核運動は存在価値があるのだろうか。

過去の侵略戦争を反省し、その最も過酷な被害者に謝罪し、補償を行うことによってはじめて、二度と侵略戦争はしないという誓いになるのではないか。「反核」を念仏のように唱えるのではなく、現実の具体的矛盾を見つめ、切開することによって新たな戦争を阻止し、戦争の根源を断てるのだ。

私達は、新しい仲間の皆さんに訴える！過去の侵略のおとしまえをつけることから反戦反核運動は始まる。即ち、最も過酷な被害者＝被爆朝鮮人の国家補償をかちとる闘いは、現在の最も重要な課題のひとつである。共に被爆朝鮮人補償闘争を斗われんことを！

優生保護法〔改正〕攻撃を粉砕しよう！

京大女解放研究会

新入生の皆さん！　既に新聞等で様々な論議がかわされている様に、優生保護法「改正」への動きが急になっています。私達は、この「改正」は女の体を更に切り刻み、女の生と性を管理抑圧し、更には日本の対外侵略体制作りの一環となるものであると考えます。多くの皆さんが私達と共に絶対に「改正」を許さないという声をあげていかれることを訴えます。

優生保護法とは、一定の用件を備えたものへの不妊手術、人工妊娠中絶の実施に関する法律で、今回問題となっているのは、中絶許可条件から「経済的理由」を削除するということです。つまり、「胎児の生命尊重」という美名の下、実質的に現行の中絶を禁止しようというのです。

女はこれまで望んで中絶してきたでしょうか？　断じて否です。様々な状況の下、産めない、産みたくない女が、確実な避妊法すらない現在望まない妊娠をしてしまった時の、最後のギリギリの選択が中絶なのです。中絶が禁止されても、望まない妊娠がなくならない限り、女は危険なヤミ中絶や、産んでもどうしようもなくなって母子心中や子殺しへと追いつめられていくことは目に見えています。そもそも産む産まないといったことが何故権力によって法律で決定されてしまうのでしょう。

「改正」の背景には「女は子産みの道具」とする見方が強くあります。女が一人の人間としてその意志で生きる前に、女として一つのレール、すなわち、学校卒業し腰かけ就職――結婚・出産・子育て――パート労働といったライフサイクルに、教育やマスコミやあらゆるものが誘導し、はみ出るものを許さないのが今の社会だと思います。女の低賃金も男の非人間的な苛酷な労働も、老人介護や育児などの福祉の切り捨てもそうした構造の中で合理化される。権力は功妙に女の生を管理し抑圧しているのです。

「改正」は女を一層こうした枠におしこめていくものです。更に「改正」により権力は優生保護法本来の機能――心身「障害」者の抹殺をより効率的に行ない、性道徳・性秩序・家秩序の回復を叫ぶことで、大きく見れば、侵略体制への地ならしをしていこうとしているのです。私達は今すぐ反対の声をあげ行動をおこさねばなりません。

女に対する差別・抑圧は、この社会の基盤をなしているが故に「見えない差別」となり、女自身もその体制にがっちりとくみこまれています。この体制を女自身の手でくい破っていく闘いを私達は模索していきたいと思っています。共に闘いましょう。私たち自身の解放のために。

地元住民と連帯して熊取二号炉を阻止しよう

京大反原発学習会

新入生諸君、君達が受験準備に大忙がしだった昨年「反核」という言葉が全国にあふれていたことを覚えているだろう。ヨーロッパの「NO NUKES（反核）」運動が、核兵器も原発も含んでいたにもかかわらず、日本に於ては、反核兵器のみで、原発は、核の平和利用という視点であった。我々は、「あらゆる原子力は人類と共存し得ない」として様々な活動をしている。

さて京都大学は、大阪府泉南郡熊取町（和歌山との県境付近）に実験用原子炉（一号炉）を持っている。一九六四年に運転を開始した二号炉の老朽化に伴ない現在、代替炉として、原子力船「むつ」と同出力（三万kw）の二号炉の増設計画――認可策動がかけられている。

一九七九年、阪大の久米氏が、実験所の一般排水路からコバルト60という放射能を発見し、我々の追跡調査によりセシウム・134、137も発見された。これは、「所外に一切の放射能は排出しない」という京大が住民と取り交した「覚え書」に違反している。然るに実験所は「微量で安全」と開き直り、学生はもとより、住民と面会すらしようとしなかった。

この放射能タレ流しを契機に、また実験所の御用学者の問題もあり、地元住民、大阪府下の労働者、学生の反対運動が高揚し、足かけ5年、二号炉の増設認可を阻止している。

二号炉は、炉本体の危険性、立地条件、地震対策、原子力推進のシンクタンクとして、絶対に認められない。

最近では、昨年春から夏にかけて、二号炉の認可策動が集中的にかけられた。大阪府原子炉問題審議会（認可機関の一つ）が、大阪市内で幾度となく開かれ、その度、地元住民、労働者、学生が連帯して、抗議行動を行なった。8月には、地元から70名を越す住民がバスで乗りつけ審議会を追いつめた。

今春5月以降あの手この手で認可策動がかけられてくるだろう。更なる支援と連帯を求めて、我々のアピールとする。

差別を許さない実践を！

――狭山ー久世を闘う会――

新入生の皆さん、まずは合格おめでとう。我々は、会設立以来、部落差別をなくそうと京大を中心に活動してきました。この一文が皆さんが差別やひいては社会の在り方・自らの生き方に何らかの助けになれば幸いです。

1. 差別を許さない生き方へ

皆さんは「差別はいけない」という事を、これ迄に学んできたと思います。差別とは、人間の尊厳を、相手の人格を踏みにじる許せないものだからです。しかし、ただ「差別はアカン」と言うのみでは駄目なんだ、と我々は思います。第三者的・評論家的な態度をとっているだけでは、差別はなくならず、口では「差別は許せない」と言いながらも実際に我々の目の前にある差別を容認してしまうことになってしまいます。皆さんが「差別を許さない」と考えるなら、どんなに小さな事からでも結構です。自らの行動としてその考えを実行してほしい。もちろん、自分の中に存在する偏見や差別意識に対しても、実行の中でそれをなくしていかねばならないと思います。そうしたことが本当に「差別を許さず、打ち破っていく」一歩となるはずだ、と我々は確信しています。

2. 狭山差別裁判 ー 無実の石川さんを取り戻そう

'63年5月、埼玉県狭山市で中田善枝さんという女子高校生が殺される事件が起こりました。いわゆる狭山事件です。その当時、警察は、数々の大失敗をしており、この事件でも40名以上の警官で犯人を囲んでいながら逃がしてしまいました。威信回復の為、警察は被差別部落の人間を「犯人」に仕立て上げれば、「ああ、部落だからそんな酷いことをするんだな」という差別意識を利用できると考え、部落のみに集中的な見込み捜査を行ないました。そして最もアリバイの突き崩せそうな石川一雄さんを「犯人」にデッチ上げたのです。ところが、石川さんが「有罪」だという物的証拠は逆に石川無実を示すものばかりだったのです。その上、現在、石川「有罪」の唯一の足がかりである「自白」(一ケ月もの間密室で取り調べられ作られたもの)も、小名木武さんという証人によって完全なデタラメと判明しました。この事件は明らかにえん罪、それも部落差別を利用した許せないデッチ上げなのです。

我々は毎月23日(石川さんの逮捕が5月23日だった)を〝狭山デー〟と名づけ、百万遍と熊野の交差点で「石川さんは無実だ」というビラをまいています。その中から少しずつ差別を打ち破り石川さんを取り戻す輪を広げていこうと考えています。皆さんが我々と共にこの斗いの輪の中に入ってきてくださる様に心から願っています。

コンピュータ社会を撃て！

――京大コンピュータを考える会――

影も形もなけれども　二本の線が伝わりて　雨のあしたも風の夜も　よろずの家を一様に　同じ時刻に訪づれて　美妙の声を発しつつ　心の園生あたためて　清く導く美しき心の花を如何せんラジオは我等の教育者―。

これは、日本でラジオ放送が開始されたときのある新聞の報道であるが、これを聞くと非常に不安な気持ちになってくる。それは、大正時代の地平から、コンピュータ化が急速に進行している現代社会を照射していると言えるからかも知れない。関東大震災を契機として日本は、戒厳体制下の時代に入っていた。15年戦争、太平洋戦争……セピア色のスクリーンの中に軍靴の音が響く。

そして、上記の文の「ラジオは我等の教育者」という意味が明らかになってくる。

現在、能率向上、人員削減の目的で、職場におけるOA化、工場へのロボット導入が一つの風潮を成しているが、一方で進みつつある各自治体へのコンピュータ導入、教育機関や図書館へのコンピュータ導入を見逃してはならないと我々は考える。

京大においても、学術情報システム構想の下で、大型コンピュータを導入した図書館が建設されつつある。これは、利用者の便を計るというので歓迎されている向きもあるが、その裏は、出版物管理・思想チェックの危険性があることを忘れてはならない。

また警察においては、地域を細かなブロックに区切って、そこに住む人々の情報を完全に掌握し、犯罪捜査に役立てようとしているが、これは見えない戒厳令体制に他ならない。

これら、公機関へのコンピュータ導入は、私たち一人一人の自由を束縛し、国家によって都合のよい人間をつくっていこうとするマスの管理を目的としたものに他ならないのだ。

しのびよる闇の時代―飛ぶ鳥でさえも自由ではないと知りつつも、私たちは強権的なものや、作り出された社会風潮に取り込まれてしまうのではなく、自分自身の自由な生き方を模索していこうと考える。

テレビには、コンピュータ関係のコマーシャルが氾濫し、街を歩けばマイコン教室に出会うという現在の風潮を、脱領域的思考で見つめていこう。

「WAR　IS　PEACE」が正当化されつつある時代の表層を、引きはがそう！　ソルボンヌの学生が、通りの敷石を引きはがしていったように!!

「平和」を「守り」たいと願う全ての人へ、あの鉄のように兇暴なイスラエルシオニスト国家の深奥から響いてくる次の詩を紹介しよう。

われわれはおまえたちの胸に石のようにのしかかるだろう
飢え
裸かで歩き
挑戦し
われわれの詩をうたいながら
怒った街路をデモンストレーションで満たし
牢獄を誇りで満たし
世代から世代へと
油断のない子供たちを育てあげ
われわれが不可能の力であるかのように
リッダで　ラムラで　そしてガリレーで。

占領下パレスチナの詩人、タウフィーク・ジィアードの詩より

インターナショナル

1. 起て　飢えたる者よ　今ぞ日は近し
　覚めよ　我がはらから　暁は来ぬ
　暴虐の鎖断つ日　旗は血にもえて
　海を隔てつ　我ら　かいな結びゆく
　いざ闘わん　いざ　奮い起て　いざ
　あゝインターナショナル我等がもの　（refrain）
　あゝインターナショナル我等がもの

2. 聞け　我等が雄叫び　天地轟きて
　かばね越ゆる我が旗　行く手を守る
　圧政の壁破りて　固き我がかいな
　いまぞ高く掲げん　我が勝利の旗
　refrain

1983年 3月発行

樹々のみどり　1983年度版

発　行　京都大学同学会中央執行委員会
京都市左京区吉田本町
電話　（751）2111　内線2570

編　集　樹々のみどり編集委員会
内線7948

印　刷　田中プリント
京都市下京区松原通麩屋町東入ル
電話　（343）0006

廃寮化攻撃と闘う寮生の決意を示す象徴となったヤグラ。これは'82年10月,教養部構内に一夜のうちにして築き上げられた。闘いの中で培われる創造力は尽きる事を知らない。